



[愛知県名古屋市]

診療所の
IT活用事例

野村医院

院長 石川敦子氏

稼働電子カルテシステム

Hi-SEED W3

(日立メディカルコンピュータ)

電子カルテの操作性と使いやすさ、 医療機器との良好な連携性を評価。 統計ツールとしての機能にも満足

石川敦子院長は医院継承に当たり院内のIT化を実施したが、基幹システムとして日立メディカルコンピュータの電子カルテ「Hi-SEED W3」を選択した。IT化の主目的は、多職種間の情報共有による医療の質向上にあったという。それは従来の診療所や病院ではカバーできない医療ニーズへの対応を前提とした目標であり、併せて専門職の雇用や医療機器の積極導入を行った。「検査結果を含めた包括的な情報共有はチーム医療の要」と語る石川院長に、目指したIT化と運用の現況、将来展望について聞いた。

多職種間の情報同時共有と 医療機器との連携性を重視

——継承前に構想されていたIT化計画から、お聞かせください。

私の専門である糖尿病内科と甲状腺疾患を中心に、病院に近い形で良質な医療を提供する環境を診療所で構築したいと考えていました。それゆえ専門職（管理栄養士や超音波検査士、診療放射線技師）を雇用し、検査機器もできる限り幅広く導入することにしました。このような体制の構築により診療所の範疇から一歩踏み出した診療を実践することで、「病院の地域版」的な役割を果たしたいと考えたのです。例えば、検査待ちや頻繁な通院の煩わしさに嫌気がさして病院から足が遠のいてしまう糖尿病患者の治療継続の支援など、従来の診療所や病院ではカバーしにくかった医療ニーズへの対応が目的であり、私の願いでした。

その目標達成には病院の栄養サポートチームのような連携が不可欠であり、チーム医療の要となる情報共有を可能にするツールとして、電子カルテの導入は必須だったのです。さらにいえば、電子カルテは検査結果を含め情報を包括的に共有し、チーム医療の質向上に貢献するシステムでなければならず、機種選定のポ

イントは主にこの2点にありました。
——具体的には、何が電子カルテ選定の決め手となったのでしょうか。

数社の製品を検討した結果、日立メディカルコンピュータの電子カルテ「Hi-SEED W3」に決めた理由の1つは「機器の持つ親和性」です。「Hi-SEED W3」のカルテ画面の見やすさは、比較した製品の中で群を抜いていました。3列レイアウトのインターフェイスはシンプルで目に優しく、画面や文字も大きいため、一見して親しみやすいデザインと気に入ったのです。父の時代からの職員は紙カルテしか知らず、ITを活用したチーム医療の実践に一抹の不安もありましたが、「Hi-SEED W3」ならば電子カルテ未経験の職員もすぐになじめるだろうと感じたことも導入動機になったのは確かです。

もう1つ決め手となったのが、電子カルテと医療機器との連携性です。「Hi-SEED W3」は、院内検査機器への直接オーダー発行や検査結果の電子カルテ取り込みを可能にする検査結果管理システム「Labo-SEED」をオプションで選択できます。このシステムは多職種における情報の包括的共有の面において大変有用であり、段階的に接続機器を増やしているところ。現在は生化学自動分析装置

と全自動血球計数器を「Hi-SEED W3」と連携させており、今後は糖尿病検査用の自動グリコヘモグロビン分析計が加わる予定です。

また、当院は日立製の超音波診断装置と一般X線撮影装置を導入しているのですが、画像ファイリングシステムと電子カルテを連携させて各モダリティの情報を診察室の端末で参照することが可能となっています。「Hi-SEED W3」は現在の連携体制から一歩進んで、日立製モダリティと連携して電子カルテから患者属性情報を装置に直接入力できる簡易MWMが選択できると聞きました。これらの機能は接続コストや接続性の面において、今後必要となるであろう医療機器の導入を容易にしてくれると考えます。

高レスポンスによる操作性、 設定の自由度の高さを評価

——継承の形でIT化ということで苦労された点はありましたか。

継承前に危惧していたIT未経験者の電子カルテ習熟に関しては、先般述べた機器の親和性に加えベンダーの親身なサポートにも支えられ、スムーズに進んだと思っています。

また、継承によるIT化では、院内LANの敷設や医療機器の配置、および

Clinic Information

野村医院



即日検査・多職種連携により 迅速かつ的確に医療を提供

野村医院は1975年に石川院長の父君が開院し、2015年9月に同氏が継承。小児科が専門だった父君の時代は外科なども含め幅広く診療していたが、継承に伴い標榜科を変更。石川院長の専門である糖尿病内科を標榜科の筆頭に掲げ、外科と皮膚科を外した。

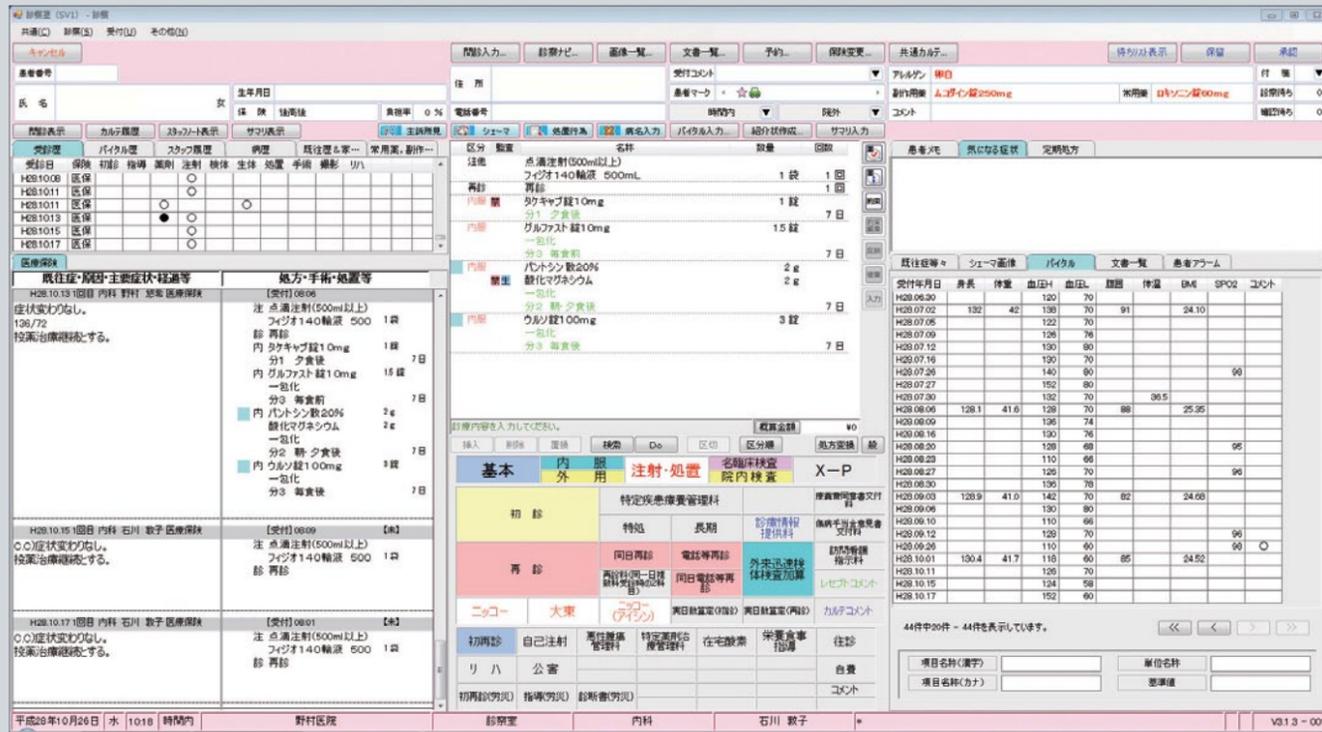
新体制での診療のモットーは「いつも笑顔で明るい診察を」。父君の時代から周辺住民に親しまれてきたプライマリケア施設として、さらに地域に根ざした医療の提供を目指す。一方で、医療機器を積

極的に導入し、病院や外注に頼らない即日検査も同院の特徴として挙げられる。

スタッフ構成は、石川院長の他に非常勤医4名、看護師4名、看護助手1名、診療放射線技師1名、管理栄養士2名（1名は非常勤）、超音波検査士1名（非常勤）、事務員3名。1日の平均患者数は70～80名。

住所：愛知県名古屋市中央区福住町1-5
電話：052-351-6261
標榜科目：糖尿病内科、内科、小児科、眼科、リハビリテーション科

カルテ入力画面

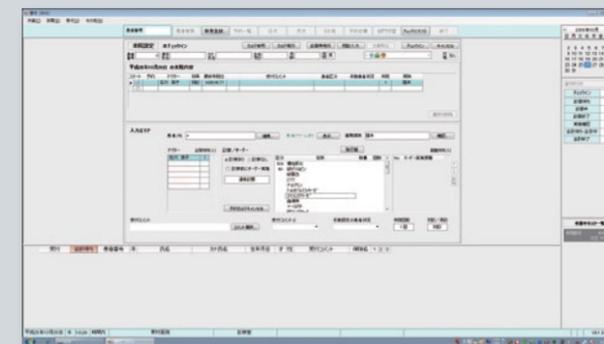


3列表示のインターフェイスを使用し、診療に必要な情報を1画面表示。迅速かつ直感的な入力により、スムーズな診療が可能。操作性にも定評があり、ストレスフリーの診療を支援

野村医院 システム構成図



来院設定予約カルテ

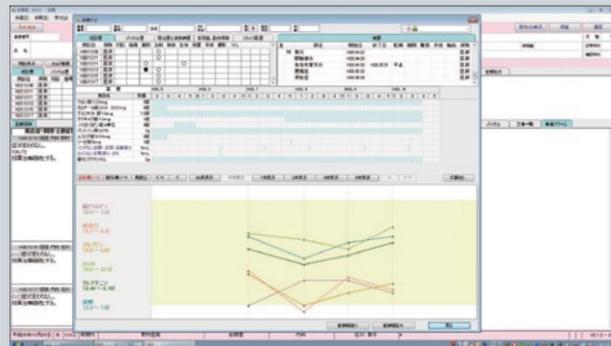


ドクター別に患者の来院設定および予約カルテの書き込みが可能。スムーズな診療を支援する機能の1つ

受付端末を2台設置し、保険証リーダー等と接続して業務を簡素化。電子カルテの使いやすさが事務員に好評



診療結果表示機能

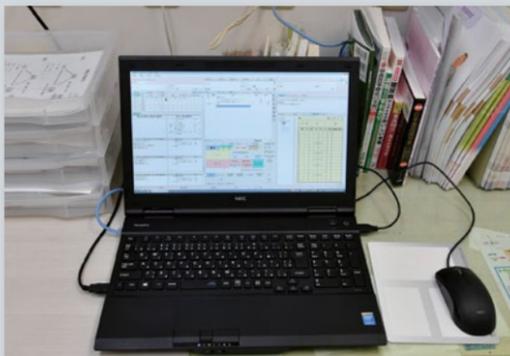


病名、診療履歴、投薬履歴、検査結果値のグラフ表示等、総合的な医療情報を分かりやすく表示

予約管理表



ドクター別に診察や検査等の予約を曜日・時間帯ごとに表示。予約状況（余裕あり、満杯など）の確認も可能



管理栄養士の端末で診療情報を共有することで、診察内容等をリアルタイムに栄養指導に反映することが可能



管理栄養士の端末ではPowerPointなどのソフトを使って栄養士が独自に患者支援のデータを制作、指導に活かしている

ネットワーク構築等を目的とした建物改修が不可欠であり、診療を継続しながら電子カルテが導入できるのかについても気になっていました。昨年4月に電子カルテや医療機器導入を含め新体制に移行したのですが、ベンダーの協力と導入方法の工夫により、3月の3連休の間に施設改修を終えることができてしまい、特に苦労したという思いはありません。

——「Hi-SEED W3」の評価ポイントについてお聞かせください。

画面立ち上げからクリック後の情報呼び出しに至るまで、とにかくレスポンスに優れている点を高く評価したいですね。それゆえスムーズな診療を実践でき、電子カルテの動作の遅さをストレスに感じていた病院時代との違いを日々実感しています。

また、勤務医の普遍的なニーズをもとに設定される病院向けの電子カルテとは異なり、個々の好みに合わせたセッティングが可能なのが診療所システムの利点ですが、その点においても「Hi-SEED W3」はとて優れています。特に登録・入力の手軽さを目的としたセッティングの自由度が高く、気づいた時にすぐ設定をアレンジできるので、導入当初よりもはるかに使いやすくなりました。

さらに、前述しましたが、検査機器との連動性に優れていることも「Hi-SEED W3」の強みの1つと考えます。診療所の場合、検査結果は後日通知と受け止めている患者さんが大半なので、「病院と同じようにその日のうちに検査結果が出て、短時間で身体状態を知ることができるのですね」と驚かれる方が多いです。

——電子カルテ関連で工夫された点についてうかがいます。

新体制移行時に管理栄養士を雇用するとともに専用室を用意し、電子カルテ端末を設置しました。これにより管理栄養士が診療情報を共有し、知り得た当日の患者情報を即座に栄養指導に活かせる体制を整えたことが挙げられます。

その連携を強化するための工夫として、管理栄養士の指導を受ける患者さんのカルテの隅に小さなマークをつけてもらい、指導終了をマークの有無で分かるようにしてもらいました。そうすることで私も管理栄養士の活動状況を把握でき、どのような指導を受けたかを知った上で診察ができます。こうした双方向の情報発信・共有により、相乗的に医療の質向上が期待できると感じています。



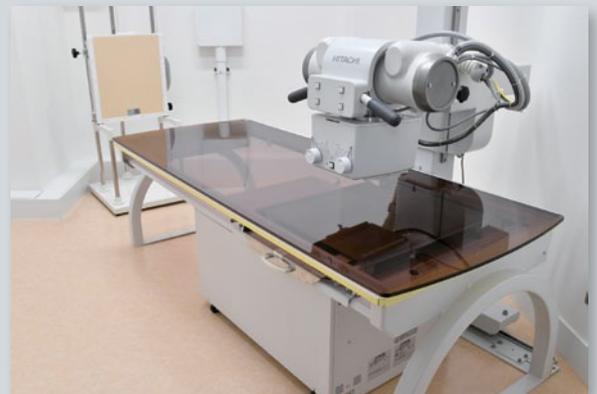
検査結果管理システム「Labo-SEED」と検査機器を連携。電子カルテから各機器への直接オーダー発行や検査結果受け取りが可能となる



日立製超音波診断装置を電子カルテと連携。通常は診察室、超音波検査士の来院時は検査室に移動させて使用する



生化学自動分析装置（写真）の他に、全自動血球計数器と「Labo-SEED」を連動。今後は自動グリコヘモグロビン分析計と接続予定



日立製一般X線撮影装置を16年9月に導入。撮影画像を診察室端末に取り込んで患者説明に積極的に活用

また、独自の工夫ではありませんが、「Hi-SEED W3」の1機能である処置や検査のオーダーや実施の情報を端末画面上で共有できる「スタッフノート」は、情報共有の観点から有用な機能であると思います。それゆえ看護師の操作習熟に合わせて、今後段階的に有効活用していきたいと計画しています。

運営・統計ツールとしての電子カルテ活用の展望

——電子カルテの導入が施設運営に貢献すると感じておられますか。

電子カルテの持つ統計機能により今現在の診療実績を簡単に把握できることが、施設運営に役立っていると感じています。

すでに1日の受診者数や患者傾向などを定期的に調査しているのですが、当然、受診者数は日によってバラつきがありま

す。その傾向がある程度分かってきたので、今後は非常勤医や看護師の人員配置に活かしていきたいと考えています。私は、現在も公立西知多総合病院の非常勤医（内分泌・代謝内科）をしており、学会活動などで席を空けることもあります。その際は非常勤医の先生に代理診察をお願いしているのですが、そのローテーション組みに活用していくということです。「Hi-SEED W3」は、そうした統計ツールとしての使い勝手にも優れていますね。

——電子カルテの今後の活用計画についてうかがいます。

現在は開業医といえども外部に情報発信していかなければならない時代ですから、まずは学会発表のための情報集計ツールとして活用したいと考えています。

また、先般述べた統計機能については、

「経営支援ツール」としての活用も十分に考えられるでしょう。具体的には、診療実績の把握を積み重ねることで地域の医療ニーズおよびその変遷を把握し、結果分かった医療需要に合わせてスタッフの増員や医療機器導入を行うといった経営計画に結び付けていきたいです。



石川敦子（いしかわ あつこ）氏

1985年愛知医科大学卒業。愛知医科大学付属病院医員助手、知多市民病院・内科部長、公立西知多総合病院・診療部統括部長等を経て、2015年9月に野村医院を継承、現在に至る。